ビブリア No. 29
福島高専 図書館報
発行 いわき市平上荒川字長尾30 福島工業高等専門学校
編集 図書委員会
昭和53年2月15日

教官から学生へ

読書のすすめ

先輩から後輩へ

＝まえがき＝

今回の学生原稿は，卒業間際の5年生に，高専入学以来の読書遍歴を語ってもらった。彼等が，期せずして，寮生活の経験者であり，入寮当時先輩や同輩たちから示唆をえて，この道（読書）に足を踏みこんだことを語っていることは，興味あることである。読書という行為は，基本的には個人の作業であり手仕事であるが，そのキッカケを作ってくれるのが，友人であり先輩である。寮だけでなく学校という集団生活は，その意味で，良い先輩や友人にめぐりあえるチャンスにみちた場所なのである。現代の若者は，好んで他人から孤立し，自分の殻にとじこもりたがるといわれているが，それでいてヒトに頼らなければ歩いて行けないようなヒヨワさを持っている。だから現代の若者は，自分の狭い殻を自分で打ちくだき，広い世界に飛び出して行く知的冒険心（好奇心）を，まず養う必要があろう。お互いの読書経験を語り合うことは，そのためのまたとないチャンスなのである。

なお，この号では，前々号（No.27）の続稿として，池田先生から，上級生の読書傾向の調査報告をお寄せいただいた。貴重な分析結果を，各人が自分の課題として，受けとめてもらいたいと思う。また，村上先生からは，文学と化学が渾然一体となった〝香気あふれる〟原稿をいただいた。やがてもう春，梅の香りもただよってくるころである。一書を懐にして，野山を散策するのにも良い季節である。

芋川平一

〈教官から学生へ〉

に お い

工業化学科　村上大三郎

源氏物語，蛍の巻に「うちしめりたる宮の御けはひも，いとえんなり。内よりほのめく追ひ風も，いとどしき御にほひのたち添ひたれば，いと深くかほり満ちて，かねて思ししよりも，おかしき御気はひを心とどめたまひけり」という一文があります。これを今様（いまよう）に思いめぐらしますと兵部卿の宮というエリートが源氏の養女，玉髪（たまかづら）をかきくどこ

うという場面で，部屋の奥深く，焚きこめた香（こう）のかほりが身じろぎと共にほのかに漂い，妖艶なその場の雰囲気をいやがにも盛りあげているところであります。

王朝貴族の生活に，「におい」がいかに密接なつながりを持っていたかをこの一文によっても知ることができるのですが，更に，正倉院につたわる香炉の工芸的な美しさ等を見ますと，わが国でも古代中国と同じ様に香（かをり）の文化があったことを知ることができます。当時つかわれた薫物の原料は麝香（じゃこう，musk）ではなかったかと考えられます。麝香は麝香鹿の牡の生殖分泌物で，牝を誘うためににおいを発する，股の袋にある粒状のもので，幽艶微妙にして，しかも強烈な芳香を放ち牝鹿の鼻を射るといわれています。その麝香が平安朝のその昔，ラブロマンスをかきたてるのにどの程度にほのかに漂ったのでありましょうか。麝香の場合，空気1ℓ中に0.000005～0.000000005㎎が含まれれば妙香がただようといわれています。いま，あの後楽園の大球場に高さ50mのドーム型の屋根をかぶせて全天候型の球場に改装しますと，直径200mのフィールドのなかほど，ピッチャーマウンドに諸君の耳かす程度の大きさの5㎎の麝香を焚くと，6万人の大観衆が佳香に酔うことになります。それでは，そんなごく微量のものをわれわれ人間が，どうやってとらえることが出来るのでしょうか。

光の科学に対する光学や，音の研究の音響学と同じように，嗅覚の研究に対して「匂学 Osmics」があります。音の高低が耳に達するには空気の振動数が関係し，光の色が眼に入るには電磁波の波長によることは常識となっていますが，匂いの質を決定するには，一世紀にわたる科学的研究にもかかわらずわかりませんでした。しかし，神経生理学者により微小電極と精密な増幅器を使って，匂いの刺激により鼻から脳に向って神経インパルス（impulse）が送られることが確かめられました。そのような事実から，鼻の嗅受容細胞に分子次元のギザギザ即ち「受容サイト（部位）」が存在し，その受容サイトに揮発性の分子がぴったりはまりこんだのち，何らかの方法で神経インパルスが発射されるという考え方が，このテーマの本題である，アムーア先生の「匂いの立体化学説」であります。(図1)

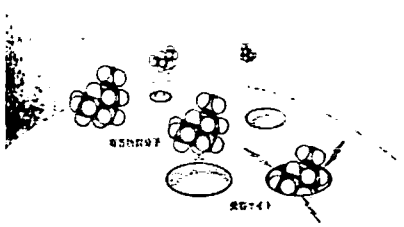


図1

化学文献を調査して，分子構造のわかっている有香化学物質を匂いの種類について分類し一覧表をつくりますと，非常に興味あることがわかります。即ち，有機化学の教科書ではまったく異なった章で取り扱われるはずの物質が，一覧表では同じ欄に現れてくることです。そのため，有香物質をありきたりの化学的或は物理的特性を基にした匂いの学説では，一覧表の分類法を説明することができず，そのかわり有香物質の立体的な大きさと非常に濃い相関があることがわかります。一例（図2）を示しますと，樟脳香を有する d－ショウノウとヘキサクロルエタンの分子模型の写真がありますが，二つの構造式にはなんの化学的共通な要素はなに一つなく，特に右側の物質は悪臭と関係の深い塩素原子から構成されているにもかかわらず樟脳香をはなつのです。共通な点は，写真でわかりますように，直径約7Å（1Å＝0.1mμ＝10^{-7}mm）の似かよった大きさ・形状であり楕円形の受容サイトにうまく適合することです。麝香を放つ化学薬品を図3にあげましたが，何れも平たい円盤状の分子で，直径約10Åです。それにふさわしい受容サイトは，楕円形の皿で図にあるように長径11.5Å，短径9Åであると考えられますが，深さはまだ確認されておりません。7番目の化合物が3－メチル－シクロペンタデカノンで，ヒマラヤの麝香鹿から産する天然の麝香で，この種の匂いの原型です。6番目は2，4，6－トリニトロ－3－メチル－第3ブチルベンゼンで，化学的には合成麝香として使用される1番目の化合物と近い関係にありますが，図でわかるように，サイトにおさまるには少々大きすぎて，ほんのかすかな麝香を発するにすぎません。面白いものですね。

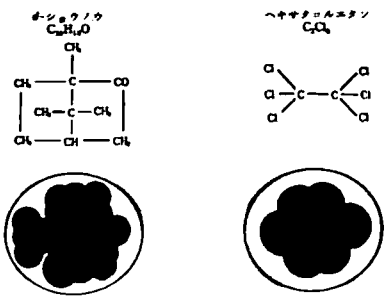


図2

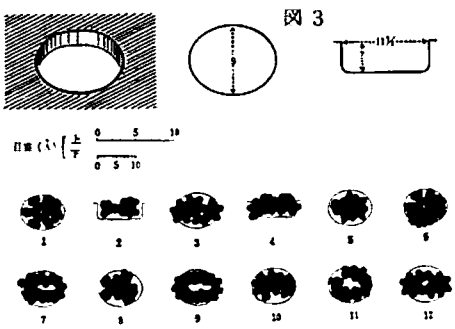


図3

受容サイトとは実際にはどういうものでしょうか。1966年に午の舌の味蕾（ミライ）から，甘い物質に

選択的に敏感な特異受容タンパク質が単離されました。それは分子量が約150,000位で、生体外でいろいろの糖と可逆的に結合し，官能テストによる糖の相対的な甘さと比例した親和性を示すことがわかりました。また，最近になって豚の舌から辛味に敏感なタンパク質も単離されました。この新しいタンパク質はキニーネ，カフェインなどの辛味物質と結合しますが，糖類とは反応しません。勿論，さきにのべた糖ータンパクは辛味物質とは反応しません。同じようなことが嗅覚についてもあることがだんだんわかってきました。画期的なことは1968年にハニーウェル中央研究所から嗅受容タンパクの発見が報告されたことです。それは兎の嗅上皮から抽出されたもので，強いラヴェンダーの花の香の発する香水の成分であるリナロールと特に結合します。有香物質とタンパク質との複合体が形成されたことは，波長267mμのところで紫外線吸収が特異的に減少することで確認されました。この臭と特異的に結合するタンパクの発見は色盲，味オンチに対する無臭覚症の人はこの適切なタンパクを合成する能力に欠けた結果おこるためであると，今まで説明できなかったことを明らかにしてくれました。

だんだん，究極の匂い探知器はタンパク質であることがわかってきましたが，このタンパク質と，さきにのべた受容サイトとの物理的関係の証明は，骨のおれる生化学的およびX線分析による研究が必要なのですが，いまのところ，これらの大きなタンパク分子は不規則でありますが一定の法則で折れ曲がり，コイル状となっており峡谷のように深い受容サイトを形成し，その周囲に配置されている官能基が基質をしっかりと掴むと推察されています。現在このように嗅受容サイトが本当に存在するということを客観的に証明するために多くの科学者が活躍しております。

学生諸君が拒否反応をおこしがちなバケガクのことなので，面白く読めるよう努力したつもりです。化学系以外の学生が一気呵成に読んでくれたら大成功と言わねばなりません。そのため，特にタンパク質関係のところなど短絡して書いたきらいもあり，本当はもっと深みのある学説なのです。小生の研究室で5Cの小泉・秋山両君が悪臭退治の研究に日夜健闘しておりますが，この「匂いのアナボコ学説」が適用できないかと期待しましたが，刺激臭化合物はそれ自体化学反応性に富んだ化合物で，よくわかりませんが臭神経或は第1脳神経によっておこる本当の匂いとは異なって，三叉神経または第5脳神経も同時に刺激しますので，また別の考え方が必要なようで，この学説の恩恵に与かれないのは残念至極であります。

「匂い－その分子構造」E・アムーア著，原訳，恒星社原生閣発行，1500円。

－完－

「先細りのの中の個性化」

── 4年生の読書分布図 ──

国語科　池　田　　豊

I　いきさつ

先々号には，夏休みにおける1年生の読書の実態を紹介したが，同時に調べた4年生のそれを，年が改まった今，「鬼を笑う」嫌いはあるが，続篇としてあげてみる。

昨年の9月9日ごろ，筆者が授業を担当するM・E・Cの三科について，専門・非専門の別なく，一切の書物を，無記名で書き出させたものに基づく。

II　読まれた本のすべて

1．文科系及び一般教養

(1)　日本文学

漱石7－こゝろ2，吾輩は……，坊っちゃん，それから，門，倫敦塔　夏目鏡子－漱石の思い出　武者小路2－空想先生，友情　百三－法然と親鸞の信仰　三重吉－桑の実　有三－波　龍之介2－河童，芥川集　谷崎－春琴抄　太宰8－斜陽2，二十世紀旗手2，人間失格，ヴィヨンの妻，津軽，ろまんとうろう　堀－菜穂子　尾崎－人生劇場　伊藤2－氾濫，詩集　椎名4－永遠なる序章，重き流れの中に，自由の彼方に，美しい女，　川端5－みずうみ2，川のある下町の話2，古都　石坂3－麦死なず，光る海，あいつと私　達三7－青春の奇術2，智慧の青草，転落の詩集，日蔭の村，稚くて愛を知らず，酒落た関係　慎太郎－太陽の季節　井上靖4－額田女王，射程，氷壁，あしたの来る人　周五郎－深川安楽亭　高橋和巳3－悲の器2，邪宗門，大江－遅れて来た青年，見るまえに跳べ　曽野－愛吉行2－夜の噂，すれすれ　住井－橋のない川　筒井－童話集　安岡－海辺の光景　新田－本居宣長　五味川－人間の条件　草野－心平詩集　遠藤3－沈黙，白い人黄色い人，ただ今浪人　庄司3－ぼくの大好きな青ひげ2，白鳥の歌なんか……星2－盗賊会社，ほらふき男爵現代の冒険　北5－ドクトルまんぼうの……3，さびしい王様，高みの見

物　司馬 5一竜馬が行く 2，燃えよ剣，峠，花神　村上 2一限りなく透明に……，海の向うで……　林一郎一たった一人の反乱　五木一男の世界　池田一エーゲ海に捧ぐ 3　三田一僕って何 4　清張 9一ゼロの焦点 2，分離の時間，Dの複合，西郷札，時間の習俗，巨人の磯，点と線，眼の気流　佐野 2一片翼飛行，狂った信号　乱歩 6一吸血鬼，緑衣の鬼，幽鬼の塔，暗黒星，黒とかげ，木馬は廻る　森村 9一人間の証明 6，悪夢の設計者，通勤快迷殺人事件，不連続殺人事件　横溝 21一刺青された男 2，華やかな野獣たち 2，呪いの塔，その他 15　佐藤さとる一手のひら島はどこにある　青島幸男一にわとりのジョナサン　平井かずまさ一ウルフガイシリーズ　別役実一異動　矢代修一一悲しき恋泥棒　富島嶽夫一早稲田の阿呆たち　石津一宇宙戦艦ヤマト　磯村一ちょっとキザですが，続……　誰かいませんか，イチかバチか，愛奴，本日ただ今誕生，きりぎりす，お嬢さんは喧嘩が好き，太宰治その愛と苦悩の人生，古典落語 2

(2)　外国文芸　46

（イギリス，アメリカ）28

バイロン一詩集　ポー一黒猫　ミッチェル一風と共に去りぬ 2　ブロンテ一嵐が丘　ヘンリー短篇集 2　サガン一優しい関係　ウィルソン一賢者の石　アダムソン一野性のエルザ　ワーキング一アルハンブラ物語　エリカジョング一飛ぶのがこわい 3　ミュージック一10年目のもう一つ別の広場　バラード一溺れた巨人　ナットヘンホフ一ジャズカントリ　ヘミングウェイ一日はまた昇る　ミラーセクサス　ヴァンボークト一非Aの世界，非Aの傀儡　アランシリトー一長距離者の孤独　ハヤカワTV一百万の昼と千億の夜　スマッシュ　世界SF傑作選　宇宙人　Around the world in eighty days

（ドイツ）2

ヘッセ一荒野の狼，ガラス玉演戯

（フランス）8

スタンダル一赤と黒　カミュ 4一異邦人，幸福な死，追放と王国，太陽の賛歌　ラフォンテーヌ一寓話，ロマンロラン一ジャンクリストフ　ボーボワール一人間について

（ロシヤ，ソビエト）7

トルストイ一懺悔　ゴリキー一母　チェホフ一短篇集　ドストエフスキー 3一地下室の手記，貧しき人々，虐げられた人々　米川一ドストエフスキー

（イタリ）

ダンテ神曲

(3)　哲学思想心理宗教　22

武士道の系譜　阿部一三太郎の日記 2　向坂一青年に寄す，日本人の意識構造　白石一楽しい心理学　吉川一本居宣長集　塚本一福音書，イスラム教とヒンズー教　池田大作一人間革命　金岡一小乗仏教概論　笠原一親鸞 4　真継一親鸞　早島一親鸞入門　増谷一絶望と歓喜（親鸞），歎異抄，神話入門，読書について

(4)　法律政治経済社会　8

知って得する法律知識　世界経済図説　日本経済図説　情報と生活　星野一技術革新 3　坂本一経営学入門

(5)　芸術言語　5

皆川一ルネサンス音楽の楽しみ　手塚一アニメーションの本　写真入門　写真のABC　BASIC言語

(6)　歴史地理　2

深田一新西洋事情　平岡一平等に憑かれた人々

(7)　その他　4

安全運転の知識　クルマとつきあう法　剣道単独練習　まちがいだらけのウィスキー選び

2．自然科学，理工学，専門技術　44

(1)　機械工学科　15

谷一飛行の原理　畑中一空間への道　平田一失われた動力文化　ポルトマン一人間はどこまで動物か　エニグマ一UFOと宇宙　中村一化学工場における機器取扱い法　行程管理　切削理論　工作機械　油圧制御 2　破壊力学入門　ソーダハンドブック　配管ハンドブック　化学プランド用ポンプ

(2)　電気工学科　17

湯川一素粒子　カーソン一沈黙の春　一万年後　相対性理論の考え方　これからの原子力　野口一トポロジ入門　トポロジー　自動電圧調整器概要　コンピュータはあなたも作る　コンピュータグラフィックス　コンピュータによる作図法　継電器　電気計測　トランジスタ回路入門　トランジスタ活用事典　オペアンプ活用マニュアル　初歩オペアンプ入門

(3)　工業化学科　12

星座物語　物質の構造　氷の世界　プラスチックの話　耐火物の化学　短波に強くなる　初心者のための半導体　NOχへの挑戦　JISに関する分析法　吸光分析法　無線アンテナ技術　クロマトグラフィーGPC

3．ベストテン，ベストファイブ（文芸）など

(1) 作家別

1 横溝正史(21)	5 夏目漱石(7)	8 司馬遼太郎(5)
2 松本清張(9)	5 石川達三(7)	8 北　杜夫(5)
2 森村誠一(9)	7 江戸川乱歩(6)	
4 太宰　治(8)	8 川端康成(5)	

(2) 作品別

森村	人間の証明 6	北	ドクトルまんぼう 3
三田	僕って何 4	池田	エーゲ海に 3
藤村	破　戒 3		

4．むすび

学生数 103名	一般教養	文芸	日本	164	249	293
			外国	46		
		哲・心・宗		22		
		法・経・社		8		
		他		9		
	自然・理工	M科		15	44	
		E科		17		
		C科		12		

(1) 調査対象のうち，全く，あるいは特殊専門書以外は読まなかった者は

M－37のうち5
E－34のうち5
C－32のうち3

合計103名に対して13名が，40日間の休み中「読書」の経験を全く持たなかったことになる。

この原因の一つには，20日間前後の工場実習があると思われ，そのことを歎いていた者も二，三あった。

(2) 「実習」というハンディはあったとして，総体に，まずしい，と言うの他ない。一方では，関心の分野が拡張し，レベルが分化してきた，とも言える。反面，ジャーナリズム（時流）に引きずられる嫌いも見える。

(3) 手ごろな，やや高級な啓蒙解説書として，新書類，叢書類が求められていることも著しい現象と見る。

(4) 授業の課題に律せられた読書（経済・倫哲など）が目につく。あながち非難すべきではないが。

(5) 先々号で見たように，1年生が混沌未分化の状態にあり，4年生になると，この様に「先細り」になってしまうのが高専の教養的読書の宿命だとするならば，2年生，3年生のうちが花と言うべく，自己の根底につちかう本物の読書はこの両学年に大いに望みを託するのほかはない。

げにも，すべて「1年生（下級生）は，4年生（上級生）の父である」ゆえに。　（53．1．20）

〈先輩から後輩へ〉

高専入学以来の「読書遍歴」

5M　上　野　真　司

「読書遍歴」というテーマであるが，それに加えて私の読書に対する考え，関係，印象に残った本について，5年生として後輩の参考になるならばと思い以下述べてみたい。

私が本当に読書と言えそうなものを始めたのは，恥ずかしいことに高専の寮に入ってからであった。中学時代は，読書は全く無意味なものだとは思っていなかったが，それ程必要性も感ぜず欲望も湧かなかった。当時の私は，精神的に未熟で本の読解力が乏しかったのと，周囲の環境の為であったろうと思う。ところが，高専に入学し寮生活を始め先輩の部屋に入ると，本の多さに驚かされた。それも，ほとんどの本が知らない著者の知らない題名の本ばかりであった。そして，先輩に読書傾向を聞かれると，ただ返事に困るばかりであった。その時，「本を読むぞ！」と決心し、私の「読書遍歴」のスタートである。尚，こういう意味で寮生活は私にとって，大いにプラスであった。

私は，読書のすぐれている点として，テレビ，ラジオ，映画と比べ，考えながら自分のペースで情報を得ることであると思う。従って，同じ内容のものでも，テレビ，ラジオでは理解の有無に関係なく進行し，完全に理解し，鑑賞し，自分のものとすることは容易なことではない。ところが，本の場合わからない箇所は，じっくり考えながら，そして自分なりに発展させて，作者のいわんとするところを吸収でき，有効に自分のものにすることができる。現代人はとかく，目と耳から受動的に入るテレビ，ラジオに余りにも慣れ過ぎてしまい，活字離れの傾向があると言われる。一冊の本をじっくりと読む機会が薄れていると思う。そこで，若い間に読書習慣を付けていることは，是非必要なことではあるまいか（これは，私の老婆心であってほしいが……。）。

話が，読書遍歴とずれたようだったが，ここで，私の読んだ本で現在覚えているものを，学年別に順に並べてみたい。

1～2学年　低学年のころは，何んとなく自分をだましだまし無理に，読んでいたようであった。

石坂洋次郎……「陽のあたる坂道」，「若い人」，「光る海」。

下村湖人……「次郎物語」。五木寛之……「青春の門」。

石川達三……「青春の蹉跌」。井上靖……「あすなろ物語」，「しろばんば」，「天平の甍」。

3学年　このごろになると，人間的に成長した為か，本の内容がよくわかり，おもしろくなり自分から積極的に読むようになった。

ドストエフスキー……「罪と罰」，「貧しき人々」

ソルジェニツィン……「収容所群島」

島崎藤村……「夜明け前」，「桜の実の熟する時」

新田次郎……「アラスカ物語」。

4学年　山岳部に入部したので主に山岳小説が多くなってきた。

新田次郎……「孤高の人」，「栄光の岩壁」，「縦走路」，「強力伝」，「孤島」，「蒼氷」，「チンネの裁き」，「岩壁の掟」，「火の島」，「芙蓉の人」，「神々の岩壁」。

ガストンレビュア……「星と嵐」。

浦松美太郎……「たった一人の山」。

井上靖……「氷壁」。

ウィンパー……「アルプス登攀記」。

志賀直哉……「暗夜行路」，「和解」，「城の崎にて」。

5学年　今まで忙しかった為，ほとんど読むことができなかったが，この頃読んだ本では次のようなものが挙げられます。

抜山四郎……「切れない包丁」，「心象歩道」，「冷えた湯たんぽ」。

以上，著者名と本の題名を並べてみたが，思い出して書いていると，懐かしいものである。

私の読書傾向としては，短編小説よりは長編小説が好きである。理由としては，「おれはこの本を読んだぞ！」という読後感が湧き，内容も豊富であるからであろう。又，私はある作者の一冊の本がおもしろいと，その作者の作品を全部読みたくなり，同じ作者の作品が続いて読むようである。どの本を読むかと，本の決定には他人からの勧めによるものが最も多く，読んだ後で勧めてくれた人と，感想などを話し合うのは楽しいものである。

私の場合は余りにも計画性のないものであったが，系統的に，およその計画を持って読書するのも一つのうまい方法であると思う。たとえば，一人の作家について，その作家の作品をできるだけ多く読むことである。そうすることによって作家が，小説というものを通して何を言わんとしているか少しずつわかり，読書のおもしろさも倍増するであろう。

次に，特に印象に残った本としては，次のような本であった。

○「孤高の人」　新田次郎

一口に言って，とても読みやすく味のある本である。私は山岳部で一層興味をひかれたが，実に読んでいて，熱中させられる本であった。これはノンフィクションであり，実在人物加藤文太郎の劇的死までを描いたものである。文太郎は神戸製鋼に勤める技術者で，素朴で無口な男であり，努力家であった。彼には登山者としてだけではなく，技術者としても学ぶ点が多くあった。私はこの本から，力を与えられたようで，この本に巡りあえて本当によかったと思っている。

○「切れない包丁」，「心象歩道」，「冷えた湯たんぽ」　抜山四郎

いずれも抜山氏の随筆集であり，内容はわかりやすくおもしろいものである。著者抜山氏は，熱伝達研究で世界的に有名な研究者であり技術者である。この随筆の中には，技術者，研究者としての考え方，生活態度，気風といったものを感じさせられた。我々技術者の先輩の作品として，一読する価値があると思う。特に，機械科の学生に勧めたい本である。

以上，まとまりのない文であったが，私の書いた読書遍歴を振り返ってみると，なんと貧しい読書生活であったかと，痛感させられる。私の場合，幸いにも，後4年間学生生活を送ることができるので，この機会を利用して，古典文学，それに英語の学習を兼ねて，簡単なものから西洋文学の原書に挑戦したい。

「私にとって読書とは，字の通り，そしてただ単に読んで書くもの，であること」

5E　渡　部　　誠

1．題名が最後になって決まった言い訳の前書き

まず最初に，私がこの文章を書く事になってから今まで，つまり明日が締切りという日の前のもうどうしようもない状態に追い込まれてペンをとった，今までに約1ケ月の期間があったにもかかわらず，どうしようもなくなって，とにかく書き始めた今でさえそのテマが決まらずに書き進んでいる事をお許し願いたい。

ただ，まったくテーマが決まっていない訳でもない事も付け加えておきたい。一応この文章を書くにあたって三つのテーマが与えられていて，A，高専入学以来の「読書遍歴」。B，専門に関する読書案内。C，趣味的分野に関した読書随想，である。ところが，これらのテーマに沿って書く，という自信が，まったくないのである。なぜなら，高専に入学しておよそ五年間というもの，読書遍歴と言えるほど読書に関してのいろいろな経験がなかった事。つまりこれから書こうと思っている二，三の作家や文章に比較的早い時期に出合ってしまい，それ以来読書傾向にほとんど変化がなく，いつもいつも同じ様な本ばかりを読んでいたし，それでも飽きるという事がなかった。さらに私の場合読書を「趣味」という言葉で置き換える事をしなかった。読書をその字の通り「書くために読む」本に限ったからである。これも後から話す事にして，そんな訳で与えられたテーマでこれを書き進めたのではどうも私の場合欠点が多すぎる。しいていえば，単に読書随想という言葉で全てを言いくるめてしまってもいいのだけれど，それではどうもうまくない，という事で，この文章の題は文章を書き終えてから決めようと，ほんの少しだけ重要な決心をして前書きを終ろう。

2．簡単なわりにはこじつけが多すぎる読書歴

次に，読書歴なるものを振り返ってみれば，はじめのうちは，やはりＳＦや推理小説を読んでいた。そしてある日突然ＳＦや推理小説から離れるのである。私が次に読み出したのは，「オリバア・ツイスト」とか「ジェーン・エア」などの，主人公の一生または半生を描いた長編であり，外国，特にイギリスの作品が多かった。こんな風に，ＳＦや推理小説から人生劇への変化というものはある程度予想できる事だと思う。なぜならＳＦや推理小説には非現実的な物が多い事，その構成が比較的簡単な事などが，少年から青年，大人への過度期にあって，もっと人生を，本当の人生を知りたい。また，寮などに入ると，否応無しに人生のきびしさなどを味わう事によって，もっと現実的な本へ向かわせるのではないだろうか。ここで，ＳＦや推理小説をつまらない物の様に書いてしまったけれど，これはあくまで十五，六才の普通の少年が読み取る事の出来る範囲を予想したまでで，これらをもっと深く読み込んでゆけば，またいろんな経験を重ねて改めて読み直してみればそれなりに，もっと別な面でのＳＦ，推理小説のおもしろさがわかるのではないだろうか。話がわき道にそれてしまったが，結局のところ，これらの本は，ほんの数冊読んだだけでつまらなくなってしまった。ストーリィが次から次へと変化し，長編を長いと感じさせないのはいいのだけれど，どうもしっくりこない。これはきっと翻訳されたせいだろうと考えた。つまり外国文学は当然の事ながら，外国の思想，習慣等がその根底にあり，その行為はわかっても，その背景になる思想，習慣にはわかりにくいところが多い。音声の出ないテレビを見ているようなものであろう。そこで次に読み始めたのは日本文学。あまりにおおざっぱな言い方だが，今でも日本の物ばかりで外国のものはほとんど読んだ事がない。ただ例外はある。推理小説をまた最近読み始めたのだが，外国物の方がおもしろいように思う。特にミステリー物になると外国物しかなく，これらは翻訳された物で十分楽しんでいる。

3．私の推薦図書は辻邦生

前に読書を「書を読む事」ではなく「書くために読む」みたいな事を書いたが，つまり，私は前に外国文学には，思想，習慣の違いから，その表現にわからない様な所があると書いた。自分のひとりよがりかもしれないが，そんな事を考えながら日本の物を読むと何となくわかったような気がするのである。特に気に入った物もなかったが，それでも，川端康成とか曽野綾子などを好んで読んでいた。ところで私は，中学の終り頃から日記をつけていた。いたって簡単な日記だが，簡単な分だけすぐ書く材料がなくなってしまって空白が出来た時にはそこに読んでいる本で気に入ったところなどを書き写していたのだけれど，そうこうしているうちに，文章を書くという事，物を風景を絵筆でなくペンによって描写する。という事に興味を覚え

はじめていたのである。だからその頃初めて読んだ庄司薫の「白鳥の歌一」以下のシリーズなどは，その内容よりも，その口語体の文章に相当に感激してその日から日記に「僕」という主人公が登場している。

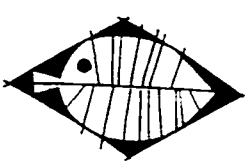
ところで，また話変るが，私が「書くために読む」事を意識しはじめたのは，以上の様な底辺があるが，それを決定的にしたもの，そして，今でも一番愛読している作家が「辻邦生」である。クニオと読むが，昔の作家風に言えばツジホウセイである。

ところが，いつ辻邦生を読み始めたのか覚えていないのである。「尾張の大殿（シニョーレ）」と呼ばれた織田信長の半生を，外国人の船員の眼を通して描いた「安土往還記」という本が最初に読んだ本であり，それ以来，私の読書は彼の作品を中心に行われた。といっても私はいわゆる遅読な方であるから，それほど多くの作品は読んでいない。しかしそのかわりより多く書く事を，今まで単に興味があるだけの書く事より確実に意識するようになったのである。そしてそれは，彼の青く澄んだ朝のように透明な文章，そしてその人生の限りなく深いやさしさの表現で愛を，人生を，死を語る人。そして「パリの手記」という日記の序に書かれた彼の文学者としてのその行為を，自分は作家になるつもりも，更になれそうにもないが，見ならう事によって自分なりの人生をより高くそして永久なものにしてゆきたいためにも，「書くために読む」事を続けたいと思う。その文章の一部を示そう。

「私が絶えず書くという事を自分に課したのはいつ頃からであったか，いま正確に記憶はない。ともあれピアニストが絶えずピアノをひくように，自分は絶えず書かなければならない。　―（中略）―
「絶えず書く」とは，何も小説や詩的作品を書く，という意味ではなく，自分の内面で直感的につかんだある思念の複合体を，はっきりと自分にも納得できる形で言い表わすことを意味していた。（後略）」

こんな事を考えながら，本を読み書いているのだけれど，実機はなかなかうまくゆかないものである。

「私にとって読書とは，字の通り，そしてただ単に読んで書くものであること」がこれで言えたかどうかはたいへん疑問である。書いていくうちに次から次へと考えが変化してしまい，一貫した話は，できなかったけれど，これを雑随想として読んでいただければ幸いである。



私の読書遍歴

5C　五十嵐　喜　雄

私は中学時代から図書館という所が好きでした。実家は会津若松ですが，毎日曜日には市立図書館に通ったものです。自分の通学している中学校の図書室が，蔵書数も少なく非常に貧弱だったからかもしれません。

やがて高専に入学し，三階建の図書館の存在は，中学時代に「図書室」しか利用できなかった私を驚かせ，また読書意欲を駆り立てたことを覚えています。

入寮後やっと落ちついた二年生の後期あたりから，私の読書遍歴は始まります（率直に言って一年生の頃は寮も学校も全く読書できるような環境ではなかったのです）。そして今，卒業を目の前にするまで読書は続いています。私は時々「なぜ本を読んだのか？」ということについて考えることがあるのですが，いつも「ただおもしろいから」という単純な結論に達してしまうのです。極論すれば，おもしろくない本は読んでも無駄だということであり，その理由は頭の中にも心の中にもちっとも残らないからです。一ページ読んでため息をつき，次の一ページを読んで「明日にしよう」としおりを入れるような本は読まない方がいいと思います。本には読むタイミングがあり，例えばあなたが三年生であり，今読んで非常につまらないと思って読むのを中断した本が，二年後あるいは三年後にあなたを感動させる場合があります。心境の変化，心の成長に伴って本から受ける印象は変化するものなのです。また恋愛の真最中の時と失恋直後では，同じ本を読んでも感じ方がちがうし，一年のうちでも季節によってちがうものです。読んでいる本が自分の心の状態とピッタリと一致した時，そこに感動が生まれ，読書の楽しさが生まれるのではないかと考えます。ですから，非常に勝手な読書論かもしれませんが，本当におもしろい（この「おもしろい」という表現にもいろいろ議論の余地があると思いますが。）本をたくさん読むべきです。また，今買ってきて数ページ読みつまらない本だと思っても，押し入れの奥深くしまったりしないで，本棚に入れておいてください。いつかあなたを感動させる日が来るはずです。

私は三年生の頃，太宰治の「人間失格」を一ページ読んでつまらなくてやめた時がありましたが，五年生も終わりの現在，たいへん興味深く読んでいます。二

十才にして太宰を読んでもかまわないのです。無理に難しい本を力んで読む必要なんかないと思いませんか？　それから四年生の夏休みに工場実習から帰ると，新田次郎の「孤高の人」を読んで感動したものです。彼は山岳文学の大家ですが，暑い夏に彼の作品を読むと，気のせいか涼しく感じます。

また私の友人には，一人の作家の作品を系統的に読む人がいますが，こういう読書法もおもしろいと思います。個々の作品のすばらしさに触れることができると共に作家の個性までも理解できるでしょう。もっと深くその作家について知りたい時は清水書院の「人と作品シリーズ」等を読むのもいいでしょう。それぞれの作家の意外な一面を知ることができるのではないかと思います。

それから本に親しむには週に最低一度は図書館や書店をのぞいてみるといいと思います。ベストセラーと言われているものにもいいものがたくさんありますし本と見合いをしている様で楽しいものです（良書との出合いは良妻との出合いに等しい価値があると思います）。また，許される限り本は買って読んだ方がいいと思います。なぜか？　いつでも好きな時に読めるからです。本は財産です。

前置きが長くなりましたが私自身の読書遍歴はというと，ほとんど日本文学ばかり読んでいたようです。外国文学は食わずぎらいもあるのでしょうが，ほとんど読んでいません。それから本棚を見ると，割合新書が多い様です。専門については（私は工業化学科なので化学関係の本を紹介しますが）講談社のブルーバックスが格好の入門書です。「環境化学入門」「ＰＰＭへの挑戦」「生命をつくる物質」「量子化学入門」など，それぞれの分野のhotな話題をとりあげ，平易に書いてありますから，結構リラックスして読めるのではないかと思います。やはりブルーバックスの「新しい化学」は新入生に是非とも読んでほしい本です。

次に専門外の本，主に日本文学ですが，私にはほとんど読書傾向が無いし，同じ作者を系統的に読むということをしないので，ここにまとめて書くには苦労するのですが，特によかったと思うものを紹介することにします。

二年生から三年生にかけては石川達三の作品を五，六冊と庄司薫の全作品を読みましたが，前者は日常生活，特に家族生活及び結婚生活等を通して，後者は我々と同年代の不安定な心の移り変わりを通してそれぞれの意図を訴えています。特に達三の「青春の蹉跌」には当時少なからずショックを受けたものでした。

三年生になり倫哲の授業を受ける様になると，宗教と日本人論についての本を読みました。宗教に関して言えば，まず第一にあげなければならないのが「聖書」でしょう。「聖書」はキリスト教徒だけのものでなく，全世界の人々に読まれている最も内容のある本であり，それだけに我々に数多くのことを教え，考えさせてくれます。日本人についての評論では，「日本人とユダヤ人」を読みましたが，巧みに日本人というものを批判しています。「甘えの構造」は，精神医学の立場から「甘え」を基礎として日本人を論じており，今でも時々読み返しています。

四年生の時は「老子」「歎異抄」「正法眼蔵随聞記」などをかなり時間をかけて読みましたが，古典というものは長い年月保存されてきただけあり，奥行きが深く現在の自分のものの考え方にも大きな影響を与えていると思います。近代文学では森鴎外，夏目漱石，最近の人では前出の新田次郎の「孤高の人」「縦走路」「強力伝」等を読みましたが，新田次郎の描く山男の純粋さ，山のすばらしさは絶妙で，迫力満点であり，読んだ後は頭の中がすっきりしたものです。三浦綾子の「塩狩峠」にも体の奥底からわき起こる何かを感じたものです。女性特有の暖かみのある文章が印象的でした。対称的に有吉佐和子の「複合汚染」は女性とは思えない鋭い目で公害問題を批判し，ショックを受けたものでした。

人間の弱さ，悲しさというものを冷静，あるいは残酷と言ってもいいくらい厳しい目で描いた遠藤周作の各作品は，暗いイメージの中にも人間の真の姿というものを教えてくれましたし，ブームになった「ルーツ」は，自分の存在の尊さ，つまり今生きている自分への感動を覚えました。

話は全く変わりますが，雑誌も結構読んだものですが，専門の雑誌では「化学工業」が話題も豊富ですし，めくっているだけでも暇つぶしの上におつりが来ます。専門外でも「文芸春秋」「中央公論」などを休み時間に読みましたし，専門バカ予防には最適だと思います。

支離滅裂な文章で，読書遍歴だか読書案内だかわからなくなってしまいましたが，裏を返せばそれだけ下級生の諸君に本を読んでいただきたいということに他ならないのです。私も五年間に読もうと思って読めなかった本が随分あります。就職しても時間を見つけて読書はしたいと思っています。

高専入学以来の読書遍歴

5土　鈴木孝二

高専五年，卒業を間近にして，本棚を見つめると，文庫本がちらほらとあるだけで，閑散として仕方ない。

小・中学校と熱を上げて，読書したのを思うと，堕落したものだと思う。

高専に入学して，初めて読んだのは，確か，五木寛之の短編小説集だった。以前から，憧れていた。しかし，別段感動もしなかった。

兄に読めと言われて，頂戴した文庫本は，今も本棚にある。安部公房の戯曲であった。「制服」「どれい狩り」等のナンセンスの戯曲である。

兄が読めといった意味がわからないまま，私は読み通した。私のそれからの読書は系統づけもなく，乱読していたように思う（多読ではなかったが）。

ベストセラーと呼ばれるものは，殆んど，読まなかった。新刊で，少し高かったせいもある。が，ベストセラーと呼ばれるものに，ある軽薄さを感じていたせいだった。

五年間，ふりかえると，さまざまなベストセラーが出現した。「ノストラダムスの大予言」「太陽人の挑戦」「青春の門」「限りなく透明に近いブルー」横溝フェア等，さまざまなベストセラーがあった。

そういう書物群が，様々な形で，思い出のなかにある。その思い出の一コマに読んでおくべきだったと，今，思う。

中学の時，熱をあげて本を読んだころとは違う読み方をしてきたと，今思う。

私の本棚の一つ，一つの本の中には，様々な人々との思い出があると思う。今まで，返すことを忘れて，自分の本になったものもある。

二年の頃，寮の同室になった同級生，今は，進路を変更してしまったが，彼は一つの本に熱中していた。時折，言葉の端に，書名を出して，興奮して語った。

二十歳の原点という日記形成のものだった。

私も，一度，彼に借りて読んだことがある。

学生運動に魅かれて運動をし，やがて，自分に矛盾して，自殺する。そんな日々を日記として残したのだった。

青春は，それぞれの人に様々な形であるだろう。泥だらけのそれ，青空のそれ，心に残る思い出はいかにひ弱でも，それは価値あるものだ。

この本の著者は，二十歳の感性を率直に，赤裸々に表現している。青春の表現に憶病な私にとって，忘れられないショックとなったように思う。

心の中に思い出と共に，いくつかの書物がある。感銘を受けた書物に，様々な人の影が刻みこまれているようだ。

今，そんな書物を読んで何を感じるだろう。あの日の感銘が戻ってくるだろうか。

私はベストセラーを余り読まない。その中で，青春の門は第二部だけ読んだことがある。その本も，友の本棚の中にあった本だった。

東京に出る伊吹とそのまわりに起る事件を通し，写し出される青春の姿は痛快に感じた。

その頃の人間関係と一冊の本とが思い出される。

もう一度，本棚を見てみよう。少しの文庫本の中にまとまった数があるのは，太宰治の作品だけである。

中学時代，どちらかと言えば好きと言えなかった。毛嫌いといってもよいほどであった。

太宰治の作品の中に，斜陽という小説がある。戦後落ちこぼれた華族の娘の日々を書いた小説を読んでから，好きになった。

今まで読んだ太宰の作品の中で一番好きなのは，晩年の中の「思い出」という短編である。作中，赤い系の伝説を弟と語りあうシーンを思い出す。

太宰の作品には，陰があるような気がしてならない。自分が持って生まれた原罪というような観念を小説中に見いだすような気がする。

思い出の中の，中学校に入学するために，その中学のある町にくる場面の着飾ったシーンや，帰郷のシーンに，寮に入寮している自分をダブらせてみたりした。

太宰治は，自分の代弁者であり，自分を説明できる人だと思ったりした。

ここまで書いてきて，専門書とか，それに類する書物がない。専門書類とかで読んだものかと探してみると，高専一年に，図書館から借りた本があるだけで，それすら，全くと言っていいほど読まなかった。

四年の時感想文を作るために読んだ，高熱隧道が土木に関する書物で読んだ数少ない一つである。

黒部第四ダムは，映画化されたりして，ある程度知られているが，その十何年か前に，黒部第三ダムが出来ている。この工事が高熱隧道の舞台である。

高温の岩盤を堀りすすむという，至極，難工事であったという。そんな自然条件の厳しさと共に，工事所長たちの男の世界に感動した。

私達，土木科の学生は，土木工学の基礎は教えても

らえる。しかし，土木の現場では，学校で習ったことが，それほど役に立たないと，先輩からよく聞かされた。

この小説の中でも，三人の新米技師達が出てくる。彼らは，現場の実際に驚き，怖れる。そして，一人はついに，気がふれ失踪してしまう。

私は，この小説を読んで，不安になった。学校で習うことでも不十分なのに，学校のものでさえ不十分にしか習得していない。

どうにかせねばと，あせったことが思い出される。その気持ちが続いていればと悔むこの頃でもある。

読書は，現在の自分を振りかえらせるものらしい。そして，未来への指針を与えてくれる。そこに，読書の価値があるらしい。

五年も押しせまったこの頃，読書への関心が高まって，今までにないくらい読んでいる。今，多読しなかったことへの後悔がある。

自分がどんな状態にあるのか，青春の一時期，人は見失ってしまう。

私もそのような状態でいた。その時，書物を読めば自分を振りかえることができるだろう。

案外簡単な問題で人は悩むものである。そんな時一冊の本がどんなに力強いだろう。

また，読書は一つの思い出となる。一つの本をめぐって交わす一つ一つの言葉が，良き思い出としてよみがえってくるようだ。

卒業期を間近にして，一つ，一つの本と，その本にかかわる思い出がうかんでくる。

新着図書目録

※印は図書館他は各教官の研究室に所在するものを分類別受入順に記載

総　記

立県百年ふくしま　毎日新聞社※
福島民報昭刷版　昭和52年9－10月号　福島民報社※
福島民報年鑑　昭和53年度版　同　※
諸根禎一
石城郡町村史　歴史図書社※
磐城郷土史　同　※
平島郡三郎
小浜町郷土読本　同　※
田村郡教育会編
春秋繁露（中国古典新書）　明徳出版
東洋文庫
317　赤松明良半生記　平凡社※
318　官子語　同　※
319　生命のおしえ　同　※

哲　学

大濱晧　老子の哲学　勁草書店※
荘子の哲学　同　※
木村英一
孔子と論語　創文社※
諸橋轍次
論語三十講　大修館書店※
老子の講義　同　※
論語の講義　同　※
東京大学中国哲学研究会編
中国思想史　東京大学出版会※
叢書身体の思想
3　恩　創文社
4　身体　同
7　気質（かたぎの話）　同
8　明治の思想肖像　同
石上玄一郎
輪廻と転生　人文書院
村上嘉実
六朝思想史研究　平楽寺書店※
図説聖書の世界
2　モーゼの歩いた道　学習研究社
講座宗教学
1　宗教理解への道　東京大学出版会※
2　信仰のはたらき　同　※
4　秘められた意味　同　※
講座現代の哲学
1　時間　空間　弘文堂※
3　言語の内と外　同　※
自然と反自然　同　※
近代日本思想大系
31　明治思想集Ⅱ　筑摩書房※

歴　史

海音寺潮五郎
1　新日本史探訪　角川書店
江戸時代図誌
1　別巻1　日本国尽　筑摩書房
8　奥州道二　同　※
同　同
図説中国の歴史
10　中華人民共和国の歩み　講談社※
11　東西文明の交流　同　※
日本都市生活史料集成
2　三都篇Ⅱ　学習研究社※
講座比較文化
2　アジアと日本人　研究社
成瀬治　世界史の意識と理論　岩波書店※
太田秀通
東地中海世界　同　※
弓削達　地中海世界とローマ帝国　同　※
嶋田襄平
イスラムの国家と社会　同　※
朝日新聞社編
朝日新聞に見る日本の歩み　経済大国のレジンマ Ⅲ　昭和46年－47年　朝日新聞社※

社会科学

井上ひさし 他
シンポジウム差別の精神史序説　三省堂
アンドルースキナー
アダムスミス社会科学体系序説　未来社
叢書身体の思想
6　土と思想　創文社
NHKブックス
302　アメリカ西部開拓と日本人　日本放送出版協会※

自然科学

S.S.Butcher
大気汚染の化学　東京化学同人※
青木幸一郎 他
電気泳動実験法　広川書店※
武内次夫
入門ガスクロマトグラフィー　南江堂※
南宮良三
ガスクロマトグラフィー　共立出版※
高山雄二
ガスクロマトグラフ法の手ほどき　南江堂※
土屋利一
GC－MSとその応用　講談社※
柴田和雄
分光測定入門　共立出版※
R.M.リンデンベール
初学者のためのNMR　培風館※
B.E.Douglas
無機化学　上　下　東京化学同人※
無機化学研究会編
無機化学実験書　広川書店※
W.E.Addison
構造無機化学入門　同　※

山崎一雄
無機溶液化学　南江堂
R.B.Hslop
演習無機化学　東京化学同人
A.コックス
基礎光化学　共立出版
D.サットン
遷移金属錯体の電子スペクトル　培風館
日本分析化学会編
錯形成反応　丸善
萩野博　金属酵素の錯体化学　南江堂
大木道則
有機化学演習　東京化学同人
塩見賢吾
有機化学　演習と解法　広川書店
小林道夫
現代有機化学演習　培風館
石田俊彦
有機反応機構　裳華房
山本栄　化学式化学記号の読み方書き方　オーム社
田治米鏡雄
地盤と震害　槙書店
福富鉄夫編
化学英語の活用辞典（研究学生版）　化学同人
ゼオライトとその利用編集委員会編
ゼオライトとその利用　技報堂
土田英俊
高分子の科学　培風館
上野景平編
キレート化学1　構造篇Ⅰ Ⅱ　南江堂
同　3　平衡と反応篇　同
同　5　錯体化学実験法Ⅱ　同
日本化学会編
化学総説1　分子軌道理論からみた有機化学反応　東京大学出版会
2　化学生態学の展望　同
3　有機化学工業における触媒　同
4　不斉反応の化学　同
5　非平衡状態と緩和過程　同
6　生体物質の化学構造と機能　同
7　分子レベルからみた界面の電気化学　同
8　複合材料　同
9　固体の関与する無機反応　同
10　化学における精密測定　同
11　イオンと溶媒　同
13　八面体の配位立体化学　同
14　味とにおいの化学　同
15　新しい芳香族系の化学　同
16　電子分光　同
17　高分子の相互作用と機能　同
ファースト
エントロピー　好学社
大木道則編
化学物質のしくみと変化をさぐる　丸善
中村亮編
英文化学文献探索の手引　共立出版
近角聡信 他
最新元素知識　東京書籍
長谷川弘道
法に指定されている公害関連物質の毒性　講談社
喜多村正次
木語　同
守田栄　騒音用語事典　オーム社
日本化学会訳編
環境防災ライブラリー生物圏資源の利用と保全　丸善
M.L.Mc Glashan
SI単位と物理化学量　化学同人
E.Cartmell
エンジニアのための化学　東京化学同人
L.T.ブライド
新しい化学　培風館
桜田耕三
物理化学演習　丸善
田中正三郎
電気化学実験法　内田老鶴圃新社
Wranglen
金属の腐食防食序論　化学同人
近藤保　生活の界面科学　三共出版
J.W.ロビンソン
機器分析　講談社
瀧田義介編
有機分析（増補版）　産業図書
島村敏　基礎ラプラス変換　コロナ社
J.R.ウォード
シグナルフローグラフ入門　同
R.D.ストルム
ラプラス変換入門　同
基礎化学講座
6　化学反応の速度と平衡　裳華房
8　酸と塩基　同
NHKブックス
303　中間子の話　日本放送出版協会
シリーズ新しい応用数学
16　線形代数　教育出版
17　共役勾配法　同
基礎化学選書
7　機器分析　裳華房
9　酸化と還元　同
共立全書
158　電気化学1　共立出版
204　同　3　同
標準応用化学講座
16　光化学　コロナ社
基礎分析化学講座
9　重量分析　共立出版
応用数学講座
10　ラプラス変換演算子法　コロナ社
井上哲編
顕微鏡のすべて　地人書館
Alexander M.Mood
Introduction to the Theory of Statistics　Third ed.
Karlb Graff
Wave Motion in Elastic Solids　Ohio State

工学・技術

土木製図基準　土木学会
海外研究開発レポート絶縁膜の破壊機構と特性　JTRA
設計施工基準案（設計編）土工第1回改訂版　土質工学会
ガラスハンドブック　朝倉書店
設計製図研究会編
新編機械設計製図法　森北出版
西田正孝
材料力学　同
杉田稔　100万人のマイクロコンピュータ　上 下　テクノ
実用マイクロコンピュータ　同
西村暎二
図説写真測量　朝倉書店
山之内雲夫 他
土木製図法　基本篇　工学出版
同　設計篇　同
春日屋伸昌
集成測量表　森北出版
同　わかる測量演習2　東京法経学院出版部
井上章　工業英文典　インターブレス
宮沢一道
ソリッドステートアンプの基礎　ラジオ技術社
ソニーテクトロニクス編
波形観測オシロスコープテクニックガイド　同
須田義明
電磁波測距儀　森北出版
池原典利
トランジスタ回路の設計　ラジオ技術社
横井与次郎
リニアIC実用回路マニュアル　同
Albred H.S.Ang
土木建築のための確率統計の基礎　丸善
関内功　耐風構造　同
岩松幸雄
橋台及び橋脚の設計と考え方　同
宮崎和典
技術デスカッションの英語表現　地人書館
福田武雄
構造力学　生産技術センター
谷田修　振動工学ハンドブック　養賢堂
戸川隼人
有限要素法による振動解析　サイエンス社
福田基一
騒音防止工学　日刊工業
Stephen P.Timosheko
新版工業振動学　コロナ社
吉岡光春
工場騒音対策の実際　同
工業英語別冊
1　和英てにをは発想辞典　インターブレス
2　和英必携用語活用辞典　機械篇　同
3　英和科学技術複合語辞典　同
4　和英電気電子活用辞典　同
5　翻訳道場　同
6　点削式自修和文英訳　同
7　英文レポートマニュアル　同
8　生かすビジネスレター　同
9　英文図面マニュアル　同
10　通事用語辞典　同
11　アブストラクト　論文要旨入門　同
12　工業英語入門&二色刷添削教室　同
13　翻訳発想辞典　同
14　オフィス百科　同
工業英語編集部編
1　マイコン時代のエレクトロニクス　同
2　発明アイデアと設計技術データ　同
3　エネルギー危機と技術データ　同
4　エンジニアリングの生産性　同
田中鎮西雄 他
数量表現　単位の換算　同
高橋昭男
頻出動詞徹底研究　同
波多野博行
高速液体クロマトグラフィー　南江堂
加藤龍夫

大気汚染のガスクロマトグラフ技術
三共出版☆
武内次夫編
大学演習工業分析化学　上　下　学術図書☆
公害研究会編
新版公害用語辞典　日刊工業☆
原子力用語研究会編
新版図解原子力用語辞典　同　☆
近藤次郎編
大気汚染　現象の解析とモデル化
コロナ社☆
志村正道
電子回路Ⅰ　リニア編　昭晃堂
同　Ⅱ　ディジタル編　同
斉藤忠夫
電子回路入門　同
日本電子顕微鏡学会東支部編
走査電子顕微鏡　共立出版
大平俊男
光化学スモッグ　講談社☆
川島金次郎
環境と放射能　汚染の実態と問題点
東海大学出版会☆
日本化学会編
環境防災ライブラリー環境浄化の化学
丸善☆
同　環境科学と技術の進歩1－2　同　☆
土木工学ポケットブック編集委員会編
土木工学ポケットブック（JR）
オーム社
土木用語辞典編集委員会編
土木用語辞典　コロナ社
トンネル工法ハンドブック編集委員会編
最新トンネル工法ハンドブック
建設産業調査会
理工学海外名著シリーズ
工学のための力学　上　下　ブレイン図書
Martin Redwood
Mechanical Waveguides
Pergamon Press
Isadore Pinchuck
Scientific and Technical
Translation　Andre Deutsch
Vera Adamson
English Studies 9 General
Engineering Texts　Oxford

芸　術

NHKブックス
文化財の保存と修復　日本放送出版協会☆
新修日本絵巻物全集
6　粉河寺縁起絵　吉備大臣入唐絵
角川書店
入江泰吉
仏像大和路　保育社
日本絵巻大成
15　後三年合戦絵詞　中央公論社
日本の仏画第二期
5　国宝　新薬　金棺出現図　松永記念館
学習研究社

語　学

ジャパンタイムス編
外国で病気になったときあなたを救う本
ジャパンタイムズ
金口儀明
現代英語の表現と語感　大修館書店
竹内真兵衛
改訂ドイツ語手紙の書き方　三修社
諸橋轍次 他
新漢和辞典　大修館書店
新村出編
広辞苑　岩波書店
新釈漢文大系
32　春秋左氏伝　明治書院☆
新英和中辞典　机上版　研究社
J.Mah Sinclair
Towardsan Analysis of Discourse
Oxford
The Oxford Illustrated Dictionary
同

文　学

桜庭信之 他
イギリスの歴史と文学　大修館書店
山本健吉
天隙の情景　集英社
安田章一郎編
エリオットと伝統　研究社
山崎正和
生存のための表現　構想社
安東次男
藤原定家（日本詩人選11）　筑摩書房
筑摩世界文学大系
89　サルトル　同　☆
世界の文学
13　ブロッホ　集英社☆
16　スパークオブライエン　同　☆
鑑賞日本古典文学
31　川柳　狂歌　角川書店☆
明治文学全集
46　新島襄　植村正久　清澤満之
綱島梁川集　筑摩書房☆
Peter Widdowson
E.M.Forster Howards and Fiction
as History　S.U.P.
P.N.Furbank
E.M.Forster　Alife
Secker & Warburg
Jane Vogel
Allegory in Dickens
University Alebana